

[論 文]

橋下劇場に関する批判的評論の分析 ーポピュリズム研究の進展のためにー

有 馬 晋 作

はじめに ー本論文の目的ー

I 橋下劇場に関する評論の全体像

- 1 大阪ダブル選挙と、その後の状況
- 2 橋下劇場に関する評論の全体像

II 橋下劇場に関する批判的評論の傾向 ー論壇誌を中心にー

- 1 政策・政治思想からの批判的評論
- 2 無思想説からの批判的評論
- 3 橋下劇場に関する批判的評論の傾向

III 橋下劇場の不思議 ーなぜ橋下氏は批判しにくいのかー

- 1 批判派からの分析
- 2 支持派からの分析

おわりに ーポピュリズム研究からの位置づけー

- 1 我が国のポピュリズム研究の状況
- 2 橋下劇場に関する評論の位置づけと劇場型首長分析の検証

はじめに ー本論文の目的ー

2011年11月の大阪ダブル選挙が橋下徹氏側の勝利に終わって、橋下氏による大阪市政改革や大阪都構想に関してメディアでの取り扱いが急増するようになった。さらに、政権交代後の民主党政権への国民の失望と次期衆院解散総選

挙がらみで、橋下氏率いる「大阪維新の会」の国政進出の動きも注目されている。その結果、2011年2月の共同通信の世論調査によると、大阪維新の会の国政進出へ期待する人は全体で61.2%にも達し（南日本新聞2012年2月20日）、橋下氏関連の評論はますます活発化している。

このような状況の中、本論文は、この橋下氏の動向を「橋下劇場」と名称した上で、具体的には次の2つを目的としている。

第1に、橋下劇場についての批判的な評論を網羅的に紹介・分析することにより、我が国のポピュリズム研究の進展に資すること。また、筆者が初めて定義し分析した「劇場型首長」の研究の進展に資する目的もある。

第2に、東原英夫前宮崎県知事や橋下徹前大阪府知事など5人の劇場型首長を取り上げて、その戦略と功罪を考察した筆者の著書『劇場型首長の戦略と功罪—地方分権時代に問われる議会—』（ミネルヴァ書房、2011年、以下「前書」と呼ぶ）の特色を、これまでのポピュリズム研究と橋下劇場関連の評論と比較することによって、あらためて明らかにすることである。

なお、本論文における「評論」とは、「専門の分野や社会の動向などについて一般の読者を啓発するために自分の意見を加えながら解説」〔三省堂『新明解。国語辞典』）する論文で、時事問題なども扱う一般の人々向けの総合雑誌（いわゆる「論壇誌」）に掲載されたものを中心としており、7月までを対象とした。

I 橋下劇場に関する評論の全体像

1 大阪ダブル選挙と、その後の状況

橋下氏は、大阪・堺両市を廃止し大阪都を新たに設置する「大阪都構想」実現のために大阪府知事職を任期途中で辞任し、2011年12月に任期切れとなる大阪市長選挙に出馬するという前代未聞の行動に出た。そのため、11月27日、大阪市長選挙と大阪府知事選挙のダブル選挙が行われることになった。選挙戦当初は、橋下氏は独裁という批判などもあって接戦とされたが、最終的には、大阪市長には橋下氏が75万票、大阪府知事には橋下氏率いる「大阪維新の会」幹事長の松井一郎氏が200万票で当選した。それぞれ、現職の大阪市長である

平松邦夫氏 (52 万票) と、同じく全国市長会会長だった池田市長の倉田薫氏 (120 万票) を大差で破った勝利だった。なお、大阪市長選の投票率は、60.92%と 40 年ぶりに 6 割を超え、有権者の関心は高かった。

2011 年 12 月 19 日に大阪市長に就任した橋下氏は、まず府市統合本部を設置した上で、教育改革のほか、無駄な事業を見直すなど市政改革に取り組んでいる。そして、朝日新聞と朝日放送との 2 月の共同調査によると、府民の橋下市長への支持率は 70% (不支持 17%) に達し、その政治手法を 67% が評価している [朝日新聞 2012 年 2 月 21 日]。

また、大阪都実現のためには法改正が必要と、国会議員を擁立するとしていた「大阪維新の会」は、今や大阪都構想以外の国政全般の政策「維新八策」を掲げて、約 2 千人を超える受講者があった「政治維新塾」をも 2012 年 3 月に設立し、次期衆院選に備えている。既成政党への失望感から国民の橋下氏のこの動きへの期待は高く、今や国政レベルの台風の目となりつつある¹⁾。

2 橋下劇場に関する批評の全体像

このような橋下氏の活発な動きもあって、総合雑誌など論壇誌に掲載される橋下劇場関連の評論の数は確実に多くなっている (表 1, 3 参照)。そこで、まず、橋下劇場に関する評論を含めメディアにおける批評すなわち賛否の全体像をみてみたい。

なお、先ほど述べたように橋下氏は 2012 年 2 月には公約ともいえる「維新八策」の「たたき台」を明示し、3 月に国政進出を目指し「政治維新塾」を正式にスタートした。そのため全国での注目度も高まり、評論もこの関連で引き続き活発である。衆院解散総選挙が、いつ行われるか、依然として先行き不透明であるが、とりあえず、大阪ダブル選挙の前と後に分けてみてみたい。

(1) 大阪ダブル選挙前の状況

2011 年 11 月の大阪ダブル選挙前の橋下氏に関する評論をみると、批判的なものが多いといえる。そして、関連の書籍も多く出版され、大手週刊誌では橋

下氏批判が展開された。この展開は、選挙に勝利のあとメディアで橋下氏支持が大きく目立つのに比べると対照的な状況といえる。

(a) 論壇誌の状況

大阪ダブル選挙前、橋下知事のこれまでの派手な言動は大衆の人気を得てきていたのに対し、論壇では批判が噴出してたとされる。

後ほど詳しく紹介するが、ここで代表的なものをいくつかあげると、大内祐和氏（中京大学教授、教育社会学）「橋下独裁は何を奪うか」（『世界』2011年11月号）、平井一臣氏（鹿児島大学教授、政治学）「劇場化し暴走する地方政治」（『世界』2011年11月号）、薬師院仁志氏（帝塚山学院大学教授、社会学）「机上の空論だらけのインチキ政策」（『新潮45』2011年11月号）、中島岳志氏（北海道大学准教授、政治学）「橋下徹大阪府知事こそ保守派の敵である」（『表現者』39号）があり、いずれも橋下氏の政策や主張の問題点を指摘し批判している²。

そのほか、大阪ダブル選挙前、特に話題になったのが、橋下氏の生い立ちを取り上げて批判を展開した『新潮45』2011年11月号での特集「最も危険な政治家、橋下徹研究」である。ここでは、上原善広氏（ノンフィクション作家）が「孤独なポピュリストの原点」と題し、死亡した実父は暴力団組員だったとし、これまで一度も書かれなかった橋下氏の生い立ちから真実を明らかにするとしている。また、この特集で、野田正彰氏（精神科医、ノンフィクション作家）は「大阪府知事は病気である」と題し、挑発的発言、扇動的な振る舞い、不安定な感情などから導き出せるのはある種の精神疾患であるとする。

この特集は、関連週刊誌に同様な記事が大きく出たため、最終的には、選挙前に全国紙の社説で「橋下氏に関しては、本人に直接関係のない情報を含め、過剰ともいえる報道が週刊誌で見られた。言うまでもなく選挙は政策を競うものだ。有権者はじっくり吟味して判断してほしい」（朝日新聞2011年11月10日社説）と指摘された。橋下氏はバッシングを受けているなど、週刊誌のこれらの記事は必ずしも良い評価を人々から得ることができなかったといえる。ただ、先ほどの選挙の展開で、選挙戦当初は接戦とされ、選挙告示後、橋下陣営

が有権者の反応が以前と違い厳しいと感じたとされるが³、これは、このような橋下氏への批判や生い立ちを取り上げた週刊誌の報道も影響したと推測できる。

表 1 橋下劇場関連の主な評論の一覧 (大阪ダブル選挙前)

大内祐和 (中京大学教授, 教育社会学) 「橋下独裁は何を奪うか」 岩波書店『世界』2011年11月号p236～244。
平井一臣 (鹿児島大学教授, 政治学) 「劇場化し暴走する地方政治—阿久根から大阪へ」 岩波書店『世界』2011年11月号p245～253。
上原善広 (ノンフィクション作家) 「孤独なポピュリストの原点」 新潮社『新潮45』2011年11月号p22～41。
野田正彰 (精神科医, ノンフィクション作家) 「大阪府知事は病気である」 新潮社『新潮45』2011年11月号p42～47。
薬師院仁志 (帝塚山学院大学教授, 社会学) 「机上の空論だらけのインチキ政策」 新潮社『新潮45』2011年11月号p48～53。
森功 (ノンフィクション・ライター) 「橋下徹, 黒い報告書—ナニワの独裁者か 真の改革者か」 文藝春秋『文藝春秋』2011年12月号p104～114。
北野和希 (ジャーナリスト) 「橋下維新, 躍進の理由」 岩波書店『世界』2011年12月号p210～217。
中島岳志 (北海道大学准教授, 政治学) 「橋下徹ハシズムを支えているものは何か」 創出版『創』2011年12月号p26～37。
佐藤優 (作家, 元外務省分析官) 「反ファシズム論では彼には勝てない」 新潮社『新潮45』2011年12月号p36～39。

(注) 大阪ダブル選挙は2011年11月27日に行われたので、12月号までは、選挙前に執筆・掲載されたといつてよい。発表の早い順から掲載。なお、()内の肩書は著者紹介から引用。通常、参考文献などでは、当然、肩書は記載しないが、いかに幅広い分野の人々が論じているかを明らかにするため肩書を記載した。

(b) 書籍の状況

大阪ダブル選挙に合わせ、総合雑誌や週刊誌で橋下氏を論じるものが出てきたが、同時に、橋下氏の大阪府政や政治手法さらに大阪都構想の是非をめぐって肯定派、批判派双方から書籍が相次いで刊行され、その売れ行きは上々だっ

たとえられる。

「肯定本」の代表格は、橋下氏と堺屋太一元経済企画庁長官（作家）の共著『体制維新—大阪都』（文春新書）で、大阪都構想の目的のほか、約3年9か月にわたった大阪府政の成果や大阪市改革の必要性などで持論を展開している。

これに対し「批判本」は、内田樹氏（神戸女学院大学名誉教授、フランス現代思想）、山口二郎氏（北海道大学教授、行政学）や精神科医の香山リカ氏らの『橋下主義（ハシズム）を許すな』（ビジネス社）のほか、府内の市長経験者や元府幹部などが執筆した『仮面の騎士、橋下徹』（講談社）で、橋下大阪府政や橋下氏の政治手法などを厳しく批判している⁴。

ところで、本論文は、論壇での社会学者による橋下劇場に関する批判的評論を紹介・整理、分析することを主な目的としているが、代表的な行政学者である山口氏については、ここで、この書籍『橋下主義（ハシズム）を許すな』（表2参照）での主張を紹介したい。さらに代表的な社会学者である上野千鶴子氏（東京大学名誉教授）の主張は、大阪ダブル選挙直後の橋下氏に批判的な書籍である『ハシズム』（表4参照）の中にあるので、同じくここで紹介したい。

山口氏は、現在の日本政治の危機は、政権交代後の失望と、橋下氏が例を示した「多数の専制」であると指摘する。民主主義は、選挙を通して専門家に任せる面があるが、橋下氏は、私に任せてくれれば鬱憤晴らしをしますよという「憂さ晴らしの専門家」だと山口氏は指摘する。重要なのは、任せきりにせずに議論をすることだが、橋下氏は議論というものを徹底的に否定し、かつ、橋下氏の持つバッシングの能力は、政治家に求められる資質ではないとする。

それと、橋下人気には、ステレオタイプが作用しているという。メディアは、より売れるステレオタイプで視聴率を稼ごうとし、橋下氏は改革イメージで、「ああいう（学校の先生とか役所の職員という）腐りきった既得権益に安住する奴らをたたきつぶそうとしているのだから正しい」というステレオタイプで人気をあげているとする。

表 2 橋下劇場関連の書籍の一覧 (大阪ダブル選挙前)

- 大阪自治体問題研究所編『橋下知事への対案』せせらぎ出版, 2008年7月5日刊行。※
- 一ノ宮美成・グループK 21『橋下大阪改革の正体』講談社, 2008年12月25日刊行。
- 産経新聞大阪社会部編著, 『橋下徹研究』産経新聞社, 2009年2月28日刊行。
- 田所永世『中間報告・橋下府知事の365日』2009年4月10日刊行。
- 読売新聞社大阪本社社会部編著『徹底検証・橋下主義 (ハシモトイズム) ー自治体革命への道』桐朋書院, 2009年6月23日刊行。
- 高寄昇三『大阪都構想と橋下政治の検証ー府県集権主義への批判』公人の友社, 2010年7月28日刊行。※
- 上山信一『大阪維新一橋下改革が日本を変える』角川SSS新書, 2010年9月25日刊行。※
- 高寄昇三『虚構・大阪都構想への反論ー橋下ポピュリズムと都市主権の対決』公人の友社 2010年12月15日刊行。※
- 大阪自治体問題研究所編『大阪維新改革を問う』せせらぎ出版, 2011年1月31日刊行。※
- 高寄昇三『大阪市存続・大阪都粉碎の戦略ー地方政治とポピュリズム』公人の友社, 2011年2月25日刊行。※
- 井出康博『首長たちの革命』飛鳥新社, 2011年3月26日刊行。
- 加茂利男ほか『地方議会再生一名古屋・大阪・阿久根から』自治体研究社, 2011年4月10日刊行※
- 吉富有治『橋下徹, 改革者か崩し屋か』中公新書クラレ, 2011年3月11日刊行。
- 倉田薫「拝啓・大阪府知事橋下徹様」情報センター出版局, 2011年8月16日刊行。
- 澤井勝, 村上弘, 大阪市政調査会『大阪都構想QAと資料ー大阪が無力な分断都市になる』公人社, 2011年9月30日刊行。※
- 大阪の地方自治を考える会編『仮面の騎士・橋下徹』講談社, 2011年10月17日刊行。
- 橋下徹・堺屋太一『体制維新一大阪都構想』文春新書, 2011年10月31日刊行。
- 内田樹, 香山リカ, 山口二郎, 薬師院仁志『橋下主義 (ハシズム) を許すなー独裁者の野望と矛盾を衝く』ビジネス社, 2011年11月15日刊行。
- 有馬晋作『劇場型首長の戦略と功罪』ミネルヴァ書房, 2011年11月30日刊行。※

(注) 刊行日の早い順から掲載 (有馬の著書は11月30日刊行だが、選挙前に店頭に並んだのでここに掲載した)。参考文献, 脚注があるのは「学術書」として最後に「※」をつけた。

そして山口氏は、ハシズムの間違いの原因は、橋下氏の手法が、軍隊的官僚主義と単純な競争主義の混合物だからだとする。前者は組織の目的に疑問を持たらなければならないので間違いを修正できず、手段自体を目的化する。後者については、本来、公共領域は市場の企業のように解雇できない。つまり国民や弱者を切り捨てることはできないのに、単純な競争主義で、個人は個人で責任を取れ、頑張れという渦の中に人々を放り込むことになるという。最後に山口氏は、東日本大震災を経験した我々が今必要なのは、悪者を捜し出して叩き、つかの間の満足に溜飲を下げるのではなく、議論を重ねて積極的に助け合いながら動き、そこから新しい公共、新しい民主政治を作っていくことであると主張する⁵。

上野氏は、小泉首相、石原都知事、河村名古屋市長、そして橋下氏のハシズム旋風の共通点は、国民の中にある改革者イメージを持った強い政治的リーダーシップへの渴望、そして、それへの白紙委任であるとする。そこには、あきあきした既存勢力に比べての未知数の魅力、何かやってくれそうだが内容は問わないという国民の意識がある。中央政治への不信と失望が広がれば、ハシズムの風は、地方から国政へ広まるだろうとしている⁶。

(2) 大阪ダブル選挙後の状況—目立つ橋下支持派—

橋下氏の大阪ダブル選挙の勝利後、橋下氏の国政進出への動向が全国レベルで注目されるなどもあって、橋下氏の政策や政治手法めぐり政治家から言論人、文化人、研究者そして芸能人まで、数多くの著名人がさまざまな意見や感想を表明し始めるようになった⁷。それは、表3に掲げた論壇誌における評論の多さや、表4の橋下氏関連の書籍の多さからも分かる。特に書籍は、2011年12月の大阪市長就任後、出版される書籍の数がますます増える傾向さえあり、過去の田中康夫元長野県知事や東国原前宮崎県知事関連の書籍の数に比べ圧倒的に多い。

前述したように、大阪ダブル選挙前は、橋下氏を批判する人々から多くの評論や書籍が出され、「ハシズム」とファシズムをもじったネーミングがなされるなど、橋下氏の独善的側面が「独裁」と強く批判された。この点は、筆者の

前書『劇場型首長の戦略と功罪』で指摘した「批判しにくい状況」が出ているとは違った展開となった。ただ、ダブル選挙前に橋下批判を展開した人々は、大阪以外の人が多いという特色があった。

一方、大坂ダブル選挙終了後からは、その選挙前の状況と対照的に、橋下氏を支持する発言が多く出るようになった。そのため逆に、筆者の指摘した「批判しにくい状況」が復活しているのかもしれない。特に、大阪府内では批判しにくい状況が生じていると予想される⁸。ちなみに、橋下氏は、これら反橋下派の人々にツイッターなどを通じて反論や厳しい言葉（バカなどの言葉もある）による反撃をあびせることが多々ある⁹。

そして、橋下氏がタレント弁護士と称されるように、知人にはメディア関係者が多いため、明らかに発信能力の高い人々に橋下氏寄りの人々が多い。すなわち批判者は研究者に多いが、支持者はメディア関係者が多いといえよう。さらに、橋下氏はブレイン政治を積極的に進めているため、実務経験のある研究者のほかメディアで話題となった人がブレインになっている。2012年6月、60人近くの特任顧問や参与というブレインが存在し、著名なブレインとしては、作家で元経済企画庁長官の堺屋太一氏、官僚批判の著書がベストセラーになった元経済産業省の官僚の古賀茂明氏などがいる。これも、橋下支持派が目立つ要因でもある¹⁰。

さらに、公約ともいえる「維新八策」のたたき台提示（2月）以降も、橋下大阪市長率いる大阪維新の会の勢いは止まらず、次期衆院選の候補者を養成する維新政治塾は、全国から約2千人の受講生が殺到する人気のため、既存政党も橋下氏の動向に危機感を感じ常に注目されている。この橋下氏の「強み」は何かと、論壇の関心も高いとされる¹¹。

表3 橋下劇場関連の主な評論の一覧 (ダブル選挙後から2012年7月号まで)

- 野中尚人 (学習院大学教授, 政治学) 「橋下徹の圧勝で大阪府民は幸せになるか」中央公論社『中央公論』2012年1月号p14,15。
- 堺屋太一 (作家, 元経済企画庁長官) 「橋下改革こそ日本の救い」PHP研究所『Voice』2012年1月号p112～119。
- 中田宏 (前横浜市長) 「いまこそ都道府県の枠組みを考え直せ」PHP研究所『Voice』2012年1月号p120～126。
- 斉藤環 (精神科医) 「浪速のヤンキー好きはいつまで続くか」PHP研究所『Voice』2012年1月号p128～135。
- 佐伯啓思 (京都大学教授, 経済学) 「反・幸福論, 橋下現象のイヤな感じ」新潮社『新潮45』2012年3月号p322～332。
- 大前研一 (経営コンサルタント) 「全国一律にから決別するとき」PHP研究所『Voice』2012年5月号p44～55。
- 平井一臣 (鹿児島大学教授, 政治学) 「首長政党の出現」後藤・安田記念東京都市研究所『都市問題』2012年4月号p48～55。
- 適菜収 (作家, 哲学者) 「橋下徹は保守ではない」産経新聞『正論』2012年5月号p87～94。
- 山田宏 (日本新党党首) 「彼の政治手法は独裁とは対極だ」PHP研究所『Voice』2012年5月号p56～63。
- 東照二 (立命館大学教授, 社会言語学) 「橋下語の魔力を読み解く」中央公論新社『中央公論』2012年5月号p138～141。
- 森政稔 (東京大学教授, 政治学) 「独裁の誘惑—戦後政治学とポピュリズムのあいだ」青土社『現代思想』2012年5月号, P77～89。
- 宮本憲一 (大阪市立大学名誉教授, 財政学) 「都市格のある街をつくろう」岩波書店『世界』2012年7月号p84～93。
- 森裕之 (立命館大学教授, 財政学) 「維新の会は大阪をどう改造しているのか」岩波書店『世界』2012年7月号p94～102。
- 松谷満 (中京大学准教授, 政治学) 「誰が橋下を支持しているか」岩波書店『世界』2012年7月号p103～112。
- 吉田徹 (北海道大学公共政策大学院准教授, 欧州政治論) 「いかに共同性を創造するか—新たな政治理論の生成過程としてのポピュリズム」岩波書店『世界』2012年7月号p113～121。
- 藤吉雅春 (ノンフィクション・ライター) 「現代日本の暗い合わせ鏡」岩波書店『世界』2012年7月号p122～129。
- 想田和弘 (映画作家) 「言葉が支配するもの—橋下支持の謎を追う」岩波書店『世界』2012年7月号p130～139。

表 4 橋下劇場関連の主な書籍の一覧(ダブル選挙後から 2012 年 7 月刊行まで)

- 第三書館編集部編, 中島岳志・上野千鶴子・藤田真理子・池田香代子ほか『ハシズムー橋下維新を当選会見から読み解く』第三書館, 2012 年 1 月 1 日刊行。
- 榊原秀訓ほか『自治体ポピュリズムを問うー大阪都維新改革・河村流減税の投げかけるもの』自治体研究社, 2012 年 2 月 20 日刊行。*
- 第三書館編集部編, 中島岳志・山本健治ほか『ハシズムは沈むかー橋下維新のウラは何か』第三書館, 2012 年 3 月 1 日刊行。
- 一ノ宮美成・グループ k 21『橋下大阪維新の嘘』宝島SUGOI文庫, 2012 年 3 月 6 日刊行。
- 二宮厚美『新自由主義からの脱出ーグローバル化のなかの新自由主義VS新福祉国家』新日本出版, 2012 年 4 月 10 日刊行。*
- 産経新聞大阪社会部『橋下語録ー独裁者か改革者か』産経新聞出版, 2012 年 4 月 19 日刊行。
- 中村あつ子『私と橋下知事の 1100 日』洋泉社, 2012 年 4 月 23 日刊行。
- 山本健治『橋下徹論ーとんでもない, とほうもない, とてつもない』第三書館, 2012 年 5 月 1 日刊行。
- 福岡政行『大阪維新で日本は変わる! ?』ベストセラーズ, 2012 年 5 月 8 日刊行。
- 田村秀『暴走する地方自治』ちくま新書, 2012 年 5 月 10 日刊行。
- 屋山太郎『屋山太郎が読み解く橋下改革ー大阪維新は日本を救えるか』海竜社, 2012 年 5 月 22 日刊行。
- 小森陽一『橋下維新の会の手口を読み解く』新日本出版, 2012 年 5 月 30 日刊行。
- Voice編集部編, 堺屋太一・大前健一ほか『橋下徹は日本を救えるか』PHP研究所, 2012 年 6 月 7 日刊行。
- 真柄昭宏『ツイッターを持った橋下徹は小泉純一郎を越える』講談社, 2012 年 7 月 2 日刊行。
- 一ノ宮美成・グループ k 21『橋下徹のカネと黒い人脈』日本文芸社, 2012 年 7 月 11 日刊行。
- 森田実『橋下徹ニヒリズムの研究』東洋経済新報社, 2012 年 7 月 12 日刊行。

(注) 刊行日の早い順から掲載。参考文献, 脚注が付いているなど「学術書」といえるものには最後に「*」をつけた。

そのため, 総合雑誌での橋下氏を扱った特集や橋下氏のリーダーシップを評価する評論が目立つようになる。例としては、『Voice』2012 年 5 月号「総力特集・橋下徹に日本の改革を委ねよ」, 『中央公論』2012 年 5 月号「徹底解剖・橋下徹」,

『正論』2012年5月号「徹底検証・大阪維新の会は本物か」があげられる。さらに、総理候補としての橋下氏をめぐる評論も出てくるようになった。この例としては、『文藝春秋』2012年6月号「人物研究・橋下徹が総理になる日」がある。なお、週刊誌でも橋下氏を総理にという記事も多く出始めるようになった。たとえば、『週刊現代』2012年5月26日号「橋下徹内閣にあの男たちが入るらしいぞ、日本が変わる」があげられる。

II 橋下劇場に関する批判的評論の傾向 —論壇誌を中心に—

先ほどみたように、橋下氏について全体としてみれば支持派の方が目立つが、論壇誌をみると批判的評論が多いといえる。そこで、社会科学の研究者による主な批判的評論を紹介し、その傾向を分析したい¹²。

1 政策・政治思想からの批判的評論

批判的な評論をみると、まず橋下氏の政策や政治思想については、小泉構造改革につらなる新自由主義・新保守主義だという指摘や批判（大内裕和、佐伯啓思、松谷満）が目立つ。さらに、すでに紹介した軍隊的官僚主義と競争原理主義の合体にすぎないという主張（山口二郎）もある。

大内裕和氏は「橋下独裁は何を奪うか」（『世界』2011年11月号）と題し、教育基本条例と職員基本条例は、教育と地方自治における徹底した新自由主義の推進によって住民主権を奪い、橋下氏による専制行政をもたらす内容を規定しているという。

小泉政権による構造改革は、派遣法の改悪をはじめ雇用領域における規制緩和を推し進め、労働者の多くが雇用の不安定を日々感じざるを得ない状況に追い込まれた。また、1980年代以降の新自由主義は、教員や自治体職員の「公務員としての安定した身分」を標的に、より不安定な状況に置かれた他の労働者の日常的な不満や嫉妬心を煽ることによって、教育分野や自治体のリストラを進めてきたという。そして前述の2条例は、その集大成といえる内容で、公務員とそれ以外の労働者との分断と対立を煽って、両者の連帯を断ち切り、新自

由主義の徹底と橋下氏の専制行政の容認を狙っているとする。このような、「小さな政府」論に基づく公共部門攻撃と社会全体での競争原理の広がり、社会全体の貧困化を進め、この「底辺への競争」サイクルが社会的な諸権利を脅かし将来への希望を失うとしている。

佐伯啓思氏は「反・幸福論―橋下現象のイヤな感じ」(『新潮 45』2012年3月号)と題し、橋下現象は、この十数年の日本社会のひとつの必然的帰結で、今日の日本社会の象徴であるとする。

橋下現象には、①橋下氏の政策は90年代からの改革すなわち成果主義、実力主義、業績主義などを徹底化する新自由主義傾向の強いものである。②人々の何か得体の知れない不満や不安をバックにしている。③橋下氏に粗野さやストレートな攻撃性がある、の3つの特色があるとする。この③の背景には、今の殺伐な時代を動かすには野蛮な行動力が必要という人々の意識と、今日の社会の特徴であるマスメディアによる「人気主義」「面白主義」というニヒリズム的世相があるとする。

そして、橋下氏が「とんでもない」のだとすれば、今の「とんでもない時代」が橋下現象を生み出しており、我々が問題とすべきは橋下現象を生み出した日本社会の現状だとする。最後に橋下氏が独裁者になるとは思わないが、得体の知れない不満に支えられた「人気主義デモクラシー」を続けていくと、いずれ本当の独裁者が登場しかねないと危惧する。

最後に松谷満氏の「ポピュリズムの台頭とその源泉」(『世界』2011年4月号)と題する評論をみてみたい。実は、その内容は橋下氏批判というよりアンケート調査に基づいた実証的な論文でもある。

松谷氏は、地方では大きな変化が生じており、それは、石原東京都知事、橋下大阪府知事、河村名古屋市長というポピュリズムとも称される首長の台頭で、なぜ有権者から大きな支持を得るかを、実証的に分析する。

まず、先ほどの首長のほか、中田宏横浜市長、松沢成文神奈川県知事、上田清司埼玉県知事、大村秀章愛知県知事ら大都市部の7人の首長を取り上げて、①政策面では新自由主義で、社会文化的には伝統・国家の重視という保守主義

すなわち新保守主義の標榜。②無党派の標榜。③新党の設立・連携に意欲的なこと、という3つの共通点を指摘する。そして、このような首長登場の背景として、利益誘導型の政治衰退で地方政治での政党が弱体化し、代替として強いリーダーシップを持つ政治家個人への期待が高まっているからだとする。

さらに、松谷氏は、石原・橋下両氏は、大嶽秀夫氏のいうポピュリズムの特徴である反エリート、「ふつう」の人々側に立つこと、善悪二元論、リーダーシップ、直接性の5つの特徴を非常に備えているという。そして、有権者へのアンケート調査によると、愛国心などを重視するナショナリズムと、格差や競争に肯定的であるネオ・リベラリズム（新自由主義）の2つの政治的価値を持つ人ほど、両氏を高く支持する傾向があるとし、ナショナリズムは高齢者を中心とする伝統的保守層、ネオ・リベラリズムは都市部の中上層と、支持する人々の層が厚く多くの支持を得るのに有利だとする。

ただ、石原氏の支持が若者層を中心に低下していることから、「ふつうの政治家」と認識されると支持が低下すると分析する。橋下氏はこの点を自覚し、「ふつうの政治家」とならないように、常に何かのトピックによって期待と関心を集め続けようとしており、そのため、言動がより挑発的になっていると分析する。最後に、松谷氏は、今後について、①ポピュリズムの純化ともいえる事態の進展すなわち既成政党による地方政治の終焉の可能性。②純化されたポピュリズムの持続可能性。③国政に波及する可能性と各地にポピュリズムの首長が登場する可能性、を指摘する。そして、政治と有権者を媒介する政党、組織の役割はこのまま失われていく一方であるのか、何らかの再生があるのか、ポピュリズム現象から、我々には、何を学び取り今後の「あるべき政治」をどう構想していくのかという大きな課題が投げかけられているとする。

2 無思想説からの批判的評論

以上、取り上げた評論は橋下氏の政策・政治思想に言及しているが、思想性はないといういわゆる「無思想説」に属する評論もある。

これに分類される中には、「従来の左右のイデオロギーでは分類できず、そ

の論理は既得権益バッシングである」という見解 (中島岳志)、橋下氏の政策を「机上の空論」と強く批判し一貫性もないという見解 (薬師院仁志)、さらに「その政治は、バッシング政治、センセーショナルな政策、巧みなメディア利用を特色とし、これを支える要因は、地域の閉塞感と住民の新自由主義的な心性と結びついたジェラシー」という見解 (平井一臣) もある。このほか、政治思想というほどのものでなく単純なる「自助主義」だという見解 (佐藤優) もある。

ここで、「無思想説」をとりあえず定義するならば、「政策や政治思想は、あくまで一定の支持を得るための手段であって、そこに体系性や一貫性を持っていないこと」と定義しておきたい。そこで、まず、「(橋下氏の政治思想は) 従来の左右のイデオロギーでは分類できない」と明確に主張する中島氏をみたい。

中島岳志氏は、「橋下徹ハシズムを支えているものは何か」(『創』2011年12月号)と題し、橋下氏の政治スタイルや考え方は、従来の左右のイデオロギーでは分類できなとし、その論理は「既得権益バッシング」で、攻撃するターゲットを絞り込み単純化と断言を繰り返していく手法であるとする。「既得権益という敵」を見せ、単純化された「解決策」を講ずれば全てがうまくいくのだと断言口調で語って、ナショナリズムを鼓舞し架空の平等性を担保していく政治手法だとする。したがって、大阪都構想の細かい部分を論争しても、問題の一番重要などころには、たどり着かないし、むしろ橋下氏の言説や断言「これをやれば全てうまくいく」という物言いが受けてしまう社会とは何か、そこを丁寧に見ていくことが問題解決の糸口になるという。

イデオロギーで分類できない例としては、橋下氏は、経済重視の新自由主義の観点からすれば原子力発電所維持の立場に立つべきだが、激しい反原発の主張をしていることである。このため大阪維新の会は、関西電力大飯原発3、4号機(福井県おおい町)の再稼働をめぐる政府の対応に反発し、次期衆院選で全面的に民主党と対決する方針をいったん取ったが、その後、条件付きの再稼働容認に転じている¹³。

さらに中島氏は、2011年3月11日の東日本大震災以降、ますます国民の政治不信は高まり、民主党政権には期待できないし、自民党政権に戻ってほしい

とは思えない中で登場したのが「大阪維新の会」を率いる橋下氏で、その期待は高まっているとする。橋下氏は、大阪市役所職員などを既得権にしがみつく勢力として叩き、大阪都構想でのガラガラポンを提唱している。イライラをため込んだ国民が「リア充」の既得権益をバッシングし、制度的「リセット」への期待を高める現実は、どこに向かおうとしているのかと危惧する¹⁴。この「リセット」という言葉が、橋下市長の施政方針の中に、「まさに今大阪でグレートリセットが起きようとしている」〔毎日新聞 2011 年 12 月 29 日〕と同じ言葉があるのは驚きである。

薬師院仁志氏は「机上の空論だらけのインチキ政策」（『新潮 45』2011 年 11 月号）と題し、橋下氏は大阪府の収支を 3 年連続で黒字にしたと言うが、借金（府債）をした上での黒字で、しかも借金は増えていると批判する。一方、大阪市の借金の元凶はバブル期に始まった第三セクター事業の破綻であるが、平松前市長の下、確実に借金は減らし市営地下鉄も黒字であるとする。そして、大阪都構想とともに市営地下鉄を民営化しようとする橋下氏の主張は、橋下知事の下で増えた府の借金を市の収入源を売り払って埋め合わせするものであると批判する。

さらに、大阪都構想という広域行政の一本化について、橋下氏は、究極の成長戦略、景気・雇用対策で企業が儲け従業員の給料をあげると主張するが、これは具体的根拠のない机上の空論と、薬師院氏は批判する。百歩譲って、広域行政の一本化が経済成長を生むとしても、従業員の非正規化が進んでいるので雇用や賃金は改善しないことは、過去の経験から明らかだとする。

また、大阪維新の会が代起立条例を反対を押し切って府議会で成立させたが、維新の会顧問の上山氏は、「日本国」「日本人」としてがんばるという考えに否定的なので矛盾するとして、橋下氏や大阪維新の会の打ち出す政策は場当たりの一貫性を欠くと批判する。

平井一臣氏は「劇場化し暴走する地方政治」（『世界』2011 年 11 月号）と題し、鹿児島県阿久根市で登場した竹原信一前市長による議会と激しく対立し専決処分を乱用した劇場型政治を分析している。

橋下大阪府知事や河村たかし名古屋市長など、現在、地方で劇場型政治を展開する首長が増えているが、これらに共通する特徴は、①バッシング政治、②センセーショナルな政策の提起や施策の実行、③巧みにメディアを利用しメディアを通じて支持の拡大を図ること、があげられるとする。そして、この地方政治の劇場化を支えるものは、①地方に漂う閉塞感、②新自由主義的な心性と結びついたジェラシーの政治、であるとする。阿久根市のような小規模自治体では、公務員の給与の高さなどへのジェラシーはより激しい形、たとえば公務員バッシングで作動しやすい。これに対し大阪や名古屋といった都市部では、議員や公務員と住民との距離は遠く、具体的に目に見える存在ではない。そこで、バッシングだけでは支持拡大には限界があるため、橋下氏は大阪都構想という新たな制度設計の提示に積極的だと分析する。

また、この地方政治の劇場化がもたらす問題点として、①敵に対する徹底した攻撃が地域社会に深刻な亀裂をもたらす恐れがあること、②人権といった基本的な問題の軽視、③定数削減、給与削減など「ダンピング選挙の横行」をあげる。

さらに、大阪維新の会を例に一步進んだ危険な状況として、①市民社会を根底から脅かす問題点。たとえば、大阪維新の会による君が代起立条例の制定は、少数意見を尊重するという市民社会の基本的あり方が掘り起こされ過剰な同調社会を生み出す恐れがあること。②極めて厳しい服務規律の問題点、③議会の死という形で二元代表制が根本から崩れるという問題点、をあげる。

特に、阿久根市は首長の暴走だったが、橋下知事の場合は自ら率いる政党が議会の多数派を構成し自治体そのものの暴走につながると危惧する。橋下知事が言う「大阪秋の陣」(ダブル選)は大阪都という一自治体の問題でなく今後の日本の自治のあり方、その前提となる市民社会や民主主義のあり方を問う選挙になると主張する。なお、対応策として、人権意識の向上と連帯の必要性を唱える¹⁵。

なお平井氏の「ジェラシーの政治」という指摘と同様な指摘は、ほかの評論でも同じようにいくつか指摘されている。前述の大内氏による不安定な労働者

の安定した公務員への嫉妬心を煽るという指摘。また、無思想説の中島氏が指摘する「あいつらが利益を得ていい思いをしている。ここを引きずり下ろせば、もしかすると自分にそのパイが回ってくるかもしれない」というような気持ちだが、先ほどのジェラシーと同じであろう。

そのほか、佐藤優氏は「反ファシズム論では彼には勝てない」（『新潮 45』2011年12月号）と題し、橋下氏にはファシズムに不可欠な2つの特徴、①資本主義が生み出す社会問題を国家権力の介入によって解決する政策、②自己のまわりを真空つまり反対勢力がない状態にする戦略、がないとする。そのため、独裁にはなれないし、むしろ橋下氏に煽られて、日本の政治に「独裁」という選択肢を提供することになったマスメディアの責任は大きいとする。

この主張の中で、佐藤氏は、橋下氏の思想は新自由主義者が好きなサミュエル・スマイルズの「自助論」であると指摘する。自助論とは、オーナー企業での社長訓辞や自己啓発セミナーでよく使われる思想で、スマイルズの「天は自らを助くる者を助く」という言葉で端的に現わされる。それは外部からの援助は人を弱くする、自分で自分を助けようとする精神こそ最も重要という単純な考えである。資本主義は市場競争を基本原理とする社会で、この自助論は、人間のすべての領域にこの市場競争を拡大したものである。そして本来、市場原理で処理できない問題に、権力で介入し解決しようとするのが政治なのに、自助論の思想は、本質的な意味で政治を放棄してしまうと佐藤氏は指摘する。つまり、この指摘は、自助論は政治思想に当たらないということになる。これが、ここで佐藤氏の主張を「無思想説」に分類した理由である。

ところで、有馬（筆者）の前書『劇場型首長の戦略と功罪』（2011）は、劇場型首長の政治スタイルと政治手法の共通性に焦点を当てて分析したものであるが、各首長の政策は違いがみられた。たとえば、田中康夫元長野県知事は、今の民主党政権スタート時の「コンクリートから人へ」の政策の考え方があってリベラル的な要素があった。また、東国原英夫前宮崎県知事は、地方の声の代弁者として国に物申すというスタイルで、たとえば道路特定財源問題では、地方での道路や高速道路の必要性を強く主張するなど、一見、地元への利益誘

導型の以前の自民党的なイメージもあった。一方、橋下徹前大阪府知事は、財政再建をめぐる知事の発言や教育基本条例、職員基本条例をみても新自由主義、新保守主義の要素が強い。すなわち前書は、首長の政治思想や政策の違いを考慮せず、その戦略と功罪の共通性を取り出して提示したものである。このことは、ここでは「無思想説」に該当するといえる。

3 橋下劇場に関する批判的評論の傾向

以上、橋下劇場に関する批判的な評論をみてきたが、ここで批判的評論に関して簡単にまとめ、その傾向をみてみたい。まずは、橋下氏の政策や政治思想について、新自由主義、新保守主義という批判と、体系的でなく一貫性もないという批判に大きく分けられる。本論文では、後者を「無思想説」と分類した。そして、前者には橋下氏の専制的、独善的な側面や攻撃的な政治スタイルをセットで批判するものも含まれ、後者には、既得権益バッシングなど攻撃的な政治スタイルに注目して論じる傾向がある。それと、前者後者の両者にもみられるが、橋下氏を支持する有権者の心理や橋下氏を生み出す社会状況を分析し問題視しているもの、橋下劇場の日本の政治や民主主義などにもたらす影響に危機感を抱くものがみられる。

以上のように批判的評論は分析、主張しているが、橋下劇場への対応策に関する見解は、民主党政権への失望の下、強いリーダーシップを望む声が高まっている中では¹⁶、必ずしも十分とはいえないといえよう。たとえば、山口二郎氏は、悪者を探し出して叩くのではなく、議論を重ね積極的に助け合いながら新しい公共と民主政治を作っていくことを提言し、大内裕和氏は「底辺への競争サイクルは社会の希望を失う」と警鐘を鳴らし、平井一臣氏は「人権意識の向上と連帯の必要性」を唱え、松谷満氏は橋下現象から学び「あるべき政治を考えるべき」だとする。有馬（筆者）は「議論し広く住民との意見交換という議会改革」（前書）を唱えた。

この橋下劇場に対する対応策をもう少し抽象的に整理すると、人々の意識向上や連帯を説く主張すなわち有権者側での対応策を主張するものと、この橋下

劇場が示している有権者の不満を、どう政策や政治のあり方に反映すべきかという政治側の対応を求めるものの大きく2つに分けられる。たとえば、筆者の「議会改革」は後者のほうに分類される。

Ⅲ 橋下劇場の不思議 —なぜ橋下氏は批判しにくいのか—

さきほど、2012年2月の「維新八策」のいわゆるたたき台を提示後の論壇の状況を少しみたが、その後も、ますます橋下氏に関する評論の関心は高まっていった。ここでは、有識者から多くの批判がなされたにもかかわらず、ますます勢いが強くなる橋下氏すなわち橋下劇場の不思議を考えてみたい。

1 批判派からの分析

森政稔氏（東京大学教授、政治学）は、「独裁の誘惑—戦後政治学とポピュリズムのあいだ」（『現代思想』2012年5月号）と題し、橋下氏の台頭は「強いリーダーシップ」を良いとする政治学者のこれまでの主張にも問題があると指摘しているが、橋下氏を批判しにくい理由も言及している。

つまり、この評論の中で、橋下氏の政策は支持者や批判者によってさまざまに検討されているが、批判を栄養源にして勢力を増大することが問題だとする。そして、橋下氏は、それなりに筋の通った論理的な政策的主張と、それと対照的な著しく感情的に敵を名指しして支持を得る「ポピュリズム」的政治の面が同居し、これらを使い分けることで政治的に有利な立場を確保してきたのではないかと分析する。

たとえば、批判者が橋下氏を独裁だと一括しようとするれば、橋下氏の政策の中で比較的合理的な面を評価する人たちから反発を受け、批判者の方がむしろ粗雑で感情的であるように映ってしまう。他方、個別の政策を議論しようとする、橋下氏はかなり詳しい知識をもっており、必要な場合はいくらかでも「柔軟」に対処され批判をすりぬけてしまう。

この場合、橋下氏の逆襲は、無能で実際を知らない学者、というステレオタイプを用いて、反知主義的な方向に人々を動員している。これは、政治理論の

世界でこのところずっと議論の中心となっていた「熟議民主主義」をあざ笑うかのようなものである。そして、橋下氏は選挙で選ばれた自らを民意の体現者として演出し、自分を批判するものを「民主主義に敵対する」として排除するということに成功しつつあると分析する。

以上の森氏の見解を、実証的に検証するような評論も出てきている。松谷満氏は、「誰が橋下を支持しているか」(『世界』2012年7月号)と題し、大阪ダブル選挙に関するアンケート調査によって橋下氏の支持状況を分析している。それによると、橋下氏を支持する人々には、まずポピュリズム的な要因として、「公務員への不信感」と「リーダーシップの重視」がある。次に、「新保守主義的な価値意識」すなわちなショナリズムおよび「新自由主義への肯定的な意識」がある。後者は、幅広いミドルクラスを支持基盤とすることもできる。

そこで、反橋下派が、前者の「公務員への不信感」「リーダーシップの重視」を批判しようとするとう感情的で操作されやすい有権者を想定した批判となる。そのとき、その批判を後者の「新保守主義、新自由主義」を支持している人がみると、どうしても感情的な批判にみえてしまう。一方、反橋下派が、後者つまり「新保守主義、新自由主義」を批判しようとするとう、従来の左派・リベラル的な批判にとらえられ、その批判はイデオロギーがかった古色蒼然としたものと映ることになる。このような状況が、橋下氏に対する批判が一向に多くの人々の受け入れられない原因といえる。そして、松谷氏は、橋下氏の打ち出すものは多数派意見の側に立ったものが多いという。そこから、「橋下が支持されるのは、有権者(マジョリティ)の意識をそのまま肯定するような主張を彼が行い、それがノーマルに受容された結果にすぎない」と分析する。

この松谷氏の評論に関しては、メディアは、「人々の先入観を揺るがせるような論考」と高く評価している〔朝日新聞2012年6月28日「論壇時評」〕。すなわち、弱者がポピュリズムを支えているのだという仮説は根拠が弱く、橋下支持の中心はむしろ「ミドルクラス」だと訴え、有権者の多数派の意識を「そのまま肯定」する主張をしているから橋下市長は受容されているという点が、新しい指摘と映ったようである。

これら2つの評論をいったん整理すると、森氏は、橋下氏の主張には、①論理的な政策的主張、②敵を激しく攻撃するポピュリズム的側面、の2つが同居しているとし、松谷氏は、①新保守主義、新自由主義的価値意識、②公務員不信、リーダーシップ重視などのポピュリズム要因、をもつ2つの支持グループがいることを指摘する。

両氏とも、①と②を批判する2つのケースを設定し、②を批判すれば、①を支持する人々から感情的な批判と写るという点では共通しており、①への批判に関しては、森氏の分析では、橋下氏は、学者は現場を知らず批判のみというステレオタイプを伴った細かい反論をし批判をすり抜けるし、松谷氏は、古い従来の左派・リベラルの批判として映るとしている。さらに、松谷氏は、橋下氏の主張は、いずれも多数派の主張と重なっていると分析する。以上のことから、橋下氏の主張への批判は、多くの賛同を得るのが難しくなっているといえる。

2 支持派からの分析

先ほどの批判派からの分析と同じような分析・指摘といえるものが実は橋下支持派からも出ている。それは、「だから右も左も批判したくなる、橋下徹論争相関図でわかった全方位メッタ斬り戦略」(小学館『サピオ』2012年6月17日号)と題し、日本の政界では55年体制の崩壊後も、保守・革新(リベラル)の両陣営が既得権益を分け合い、なあなあの国家運営が続いてきたが、橋下氏はこの仕組みに挑戦しようとしているとする。そして、それは、「既得権を液状化」するもので、それは左右のどちらかに立脚した従来型の政策立案をしていないからだとする。

そのため、リベラル系は橋下氏の「君が代」を目の仇にして批判するが、自分たちの主張と一致する原発再稼働反対の動きを評価して後押ししようとしないうし、一方、保守系は、橋下氏の再稼働反対論を噛みついて、教育改革には援軍を送ろうとしないとする。両陣営とも既得権益を失うことを恐れ、橋下氏と方向が一致する本来支持すべき政策を含めて「進め方が独裁的だ」と、政治手法にすり替えて批判していると分析する。

さらに現在、橋下氏のディベート術によって視聴者、有権者には「橋下よく言った」という支持が広がっているという。その結果、既得権益を失うことを恐れる左右の勢力は、彼らにとって「危険な改革者」である橋下氏を国民から切り離そうと、なりふり構わず「独裁者」「ヒトラー」と批判をエスカレートさせているという。だが橋下氏は選挙で有権者の支持を得た改革を、議会を通じて実現している。その政治手法はリーダーシップと呼びこそすれ、決して独裁ではないと主張している。この橋下支持派の主張も興味深い。つまり、これは「無思想説」といえる。

このように橋下支持派からは、橋下氏の政策は従来の保守革新にとらわれない既得権益を狙い打ちにする改革的政策で、保守革新とも既得権益を失いたくないので、独裁者などという感情的な批判に終始しているという指摘がある。つまり、橋下氏の政策は、既得権益を守ろうというグループがいて日本の社会がよくならないので改革が必要という小泉首相の頃からのステレオタイプの考えともいえよう。ただ、ステレオタイプだけに、この考えは多くの人々の支持を得やすい。

すなわち、これらを短くまとめ分析すると、橋下氏の政策は、①多数意見にそった政策や価値意識、②既得権益を守ろうとするグループがいて日本社会が良くなれないというステレオタイプ、の2つから作られている。結局、橋下氏の主張は幅広い人々の支持を得やすいものになっているため、橋下氏を批判しにくくなっているといえよう。

おわりに 一ポピュリズム研究からの位置づけ一

次に、橋下劇場に関する評論をどう位置づけるかについて、ポピュリズム研究の視点から考察してみたい。そこで、まず我が国のポピュリズム研究の状況をみた上で、本論文で紹介した橋下劇場に関する評論と筆者の前書とを、ポピュリズム研究の視点から位置づけてみたい。

1 我が国のポピュリズム研究の状況

ポピュリズムの意味は曖昧とよく指摘されるが、「ポピュリズム＝大衆迎合」というように使われるように、ポピュリズムは消極的・否定的な意味で使われることが多い。また何気なく使われる「ポピュリズム」や「ポピュリスト」という言葉が一般的に何を言い表しているかは明確でない。だが、ポピュリズムは「大衆迎合」や「デマゴギー（扇動）」、ポピュリストは「専制者」や「独裁者」といった言葉と同義に用いられることが多いとされ、あまり良くないものとされる。ただ、既存の政党や政治勢力に代表されない人々による運動という点では、大方の意見の一致をみているという¹⁷。

そして、ポピュリズムを、吉田徹氏は、「国民に訴えるレトリックを駆使して変革を追い求めるカリスマ的な政治スタイル」と、また山口二郎氏は「大衆のエネルギーを動員しながら一定の政治的目標を実現する手法」と定義し、エネルギーを引き出すとき言葉が決定的な意味を持つという¹⁸。

次に、ポピュリズム研究の現状をみたい。吉田氏によると、政治現象の分析を役割とする政治学も、ポピュリズムについては、それほど多くの知見を持っているわけではないという。世界的にみても、ポピュリズムの概念が包括的に取り扱われるようになったのは比較的最近である。ポピュリズム研究はまだ緒についたばかりで、草分け的な存在は、アーネスト・ゲルナーとギター・イオスクの『ポピュリズム』（1969年刊行）があげられる。それまでのポピュリズム研究は、その分類や個別的な紹介に多くを割かれるのが常であったが、この本はその「意味内容」まで踏み込んだ最初のものという¹⁹。

我が国では、小泉政治を経験してポピュリズム現象への関心が初めて高まったといえる。先駆的で代表的な研究は、大嶽秀夫氏の『日本型ポピュリズム』中公新書2003年、『小泉純一郎ポピュリズムの研究』東洋経済新報社2006年があげられる。このように我が国のポピュリズム研究の歴史は浅く、ここで取り上げた橋下氏などのポピュリズムの首長は、やっと研究者が最近取り組み始めたぐらいである。

このような中、吉田氏は、海外ではレーガン大統領やサッチャー首相、我が

国でも中曽根首相と、新自由主義（ネオ・リベラリズム）をともなったポピュリズムが 1980 年代に登場し、この「ネオ・リベラル型ポピュリズム」の延長線上に、フランスのサルコジ大統領やイタリアのベルルスコーニ首相のような 21 世紀における「現代ポピュリズム」があるとする。吉田氏は、この「現代ポピュリズム」は、①企業の発想に基づく政治、②物語の政治、③敵作りの設定、の 3 つの特徴があるとし、日本では、小泉政治が本格的に実践しているという²⁰。ところで、ポピュリズム首長については、すでにマスメディアで、「首長は、住民の直接選挙で選ばれる大統領制に近いので、候補者は民意をより反映しやすい。特に役所や地方議会による税金の無駄遣いが表ざたになった昨今、既得権益打破を掲げた、しがらみのない候補者が予想外の人気を得ることがままある。言ってみれば、ポピュリズムである」〔柿崎明二、共同通信編集委員、南日本新聞 2011 年 12 月 26 日〕と紹介されているように、かなり一般的になっているといえよう。だが筆者（有馬）がみるに、まだまだ評論的なものも数は少なく、当然、研究論文というものも少ない。ただ最近、橋下氏の登場で本論文でみたように、評論を中心にポピュリズム的な首長を含めポピュリズムに関連する議論が活発化しているともいえる。

2 橋下劇場に関する評論の位置づけと劇場型首長分析の検証

このようにまだまだ歴史の浅いポピュリズム研究であるが、ここで紹介した橋下劇場に関する評論に関して、ポピュリズム研究の視点からの位置づけをしてみたい。

第 1 に、さまざまな分野の人々が議論に参加していることと、国政進出をめぐるメディアから注目されていることもあって、我が国のポピュリズム現象の代表的な事例となる可能性が高いということである。

第 2 に、これまでのポピュリズムと称された政治家で、これほど多くの研究者や有識者が論じた事例はないので、我が国におけるポピュリズム研究の進展が期待されることである。

第 3 に、前述したように現代のポピュリズムは新自由主義の延長線上にある

ともいえるが、本論文で指摘したように「無思想説」というポピュリズム現象があり得ることを示したのは、ポピュリズム研究における新たな視点かもしれない。

最後に、前述の吉田徹氏の現代ポピュリズムの3つの特徴から、筆者の前書『劇場型首長の戦略と功罪』の論理展開を検証してみたい。前書は劇場型首長を「本来、政治は人々の利害や価値（思想）の調整をするものであるにもかかわらず、一般の人々にとって分かりやすく劇的にみせる政治手法を用いて、自分の政治目的を実現しようとする首長」と定義したように、その多用する政治手法について、吉田氏のいう③敵作りの設定を中心に戦略として明らかにしたものであるといえる。そして、①企業の発想に基づく政治は、首長が都市部から農村部まで多様な地域にわたるため、田中康夫長野県知事や東国原英夫宮崎県知事など、企業の発想に基づく政治に該当しない事例も出てくる。このため、前書は本論文でいう「無思想説」に分類されるといえる。しかし、もし①企業の発想に基づく政治の意味を企業のように消費者のニーズに沿った経営すなわち有権者のニーズにそった行政運営ととらえるならば、劇場型首長も有権者（一般の人々）のニーズに対応しているので、①を満たしているともいえよう。このようにみていくと、筆者の前書も吉田氏の現代ポピュリズムと重なる面もあるといえよう。

ちなみに、筆者が初めて定義し分析した「劇場型首長」という用語は、大阪ダブル選挙後、しばしばポピュリズム研究の論文で取り上げられるようになった。たとえば、平井一臣「首長政党の出現」『都市問題』2012年4月号（表3参照）、植松健一「自治体ポピュリズムの憲法政治」榊原秀訓『自治体ポピュリズムを問う』自治体研究社（表4参照）がある。中には、筆者の劇場型首長を念頭に「近年のポピュリズム論および劇場型政治論は、あまりに多くの対象を包含することになって」、より正確な分析には範囲を絞った分析が必要との批判的な指摘〔松谷満「誰が橋下を支持しているのか」『世界』2012年7月号p104〕もみられる。ただ、勢いが増すポピュリズム的な首長の功罪を一般の人々にも分かりやすく示すためには、マスメディアでは用いられるが必ずしも十分に定義し分

響がなかった「劇場型」という用語を用いたのは、このような一定の反響があったことから意義あるものだったと考えている²¹。

以上、本論文は、橋下劇場に関する批判的評論を分析した。橋下氏の早い動きに対応するため、取り急ぎの分析になった感もあるが、この分析が今後のポピュリズム研究の進展に貢献することを期待したい。

1 以上、本節は橋下氏関連の新聞記事を参照。

2 以上、南日本新聞2011年10月29日、共同通信配信「ウオッチ論壇10月」。

3 有権者の反応が良くないとの指摘は、北野和希「橋下維新、躍進の理由」岩波書店『世界』2011年12月号p214。

4 以上、読売新聞2011年11月19日。

5 以上、内田・香山・山口・薬師院『橋下主義（ハシズム）を許すな』ビジネス社、2011年P54～81。

6 以上、第三書館編集部編『ハシズム』第三書館2012年P138,139。

7 第三書館編集部編、前掲書p87一部参照。なお、この書籍p88,89の「文化人・経済人の親ハシモト・反ハシモトのマトリクス」は、橋下氏をめぐる支持派批判派の状況を分かりやすくまとめている。

8 たとえば、政治評論家の森田実氏は、自分の大阪でのタクシーに乗り橋下氏批判をしたらドライバーから叱られた経験から、今、大阪で橋下批判を公然と行うのは危険だという〔森田実『橋下徹、ニヒリズムの研究』東洋経済新報社2012年p57〕。

9 橋下氏のツイッターの状況は、毎日新聞（大阪本社）2012年5月29日夕刊参照。

10 前掲注7の「マトリクス」参照。ブレイク政治に関しては、毎日新聞（大阪本社）2012年6月19日参照。

11 論壇の状況は、南日本新聞2012年5月5日、共同通信配信「ウオッチ論壇4月」参照。

12 以下、ここで紹介する評論は、南日本新聞2011年10月29日、共同通信配信「ウオッチ論壇10月」。宮崎日日新聞2011年12月30日、共同通信配信「論考12月」を一部参照。

13 原発問題は、宮崎日日新聞2012年4月15日一部参照。

14 中島氏に関しては、宮崎日日新聞2011年12月30日、共同通信配信「論考12月」を一部参照。

15 対応策は、平井一臣『首長の暴走』法律文化社2011年p150。

16 たとえば、橋下人気の大きな要因は、決定できない民主党政権に比較して「決定できる民主主義」を標榜しているからという分析〔星浩、朝日新聞2012年2月19日〕がある。

17 吉田徹『ポピュリズムを考えるー民主主義再入門』NHK出版、2011年、p64,72,142。

18 吉田徹、前掲書p14。山口二郎『ポピュリズムの反撃ー戦後民主主義復権の条件』角川書店、2010年p11。

19 吉田徹、前掲書p69,70,14,234。

20 吉田徹、前掲書p18,19,55。

21 実は、橋下氏のダブル選勝利後の2011年11月29日、TBSテレビの昼の情報番組「ひるおび」の中の「知っとく」のコーナーで、筆者の「劇場型首長」の相互分析が20分ほどの時間を費やし紹介された。このことは、マスメディアが取り上げ多くの人々にメッセージを発するには、分かりやすい用語を用いる必要があることを示唆している。

